

#### 第4回ローザンヌシンポジウム・テーブルディスカッション

第4回ローザンヌシンポジウムが2014年11月8日に開催された。始めに3人の方（マイケル・オー氏、田中牧子氏、渡部信氏）の発表を聞いたのち、テーブルグループに分かれてディスカッションをする時間を持った。

ディスカッショントピックとして提案されたものは以下の2項目である。

- 1) 自分のあり方を振り返り、自分が関わっている人々との間で「誠実」をどう考え、どう行動していくかを考えて見ましょう。
- 2) 世代による「誠実」のとらえ方の違いを述べ、相互に理解しましょう。

テーブルリーダーたちは、出席者のそれぞれの思いを大切にすることに心がけて進行した。以下、各テーブルで出された思いを、できるだけトピックごとに分けて紹介する。これらは、各出席者からの生の声である。

#### ☆ 謙遜・誠実・質素 (Humility, Integrity, Simplicity = HIS)

- ・ローザンヌ運動の中で、HIS を実践するのみではなく、周囲の人にもどう伝えていくか？ 妥協している部分を見出し、見つけていくことが HIS の実践である。イザヤ 9:6 にあるように「平和の君を送ってくださった万軍の主の熱心」があるので、HIS の実践が大切である。
- ・HIS はそれぞれ違うけれどもつながっている。いずれも受けたあわれみをどう外に表していくかが重要である。
- ・聖書的な文脈で、謙遜、誠実、質素を理解する必要がある。儒教的な意味合いで理解してしまうと、少し意味合いが異なってくる。

#### \* 誠実さ

- ・日本人が理解する「誠実さ-Integrity」を考えさせられた。日本の文化には「表と裏」、「本音と建前」がある。日本の教会では「本音と建前」を使い分けるべきと考えるクリスチャンは多いと思う。
- ・何が神に対する「誠実」なのか、自分の価値観に照らすのではなく、聖書は何と言っているか、神学的に確認することを意識しようと思った。

\* 質素

- ・「質素」のイメージは清貧、貧しく地味と世代による異なる。何のために使うかを大切に  
するより肯定的に見ることが大切。質素のとらえは、また文化的にも異なるため「みな  
がこうしなければならない」と決めるのは大変難しい。最終的には個人の心の問題であ  
る。

\* 悔い改め

- ・こうしていることが罪であると示されたならば、認めて悔い改めることが重要である。  
(見かけが問題なのではない。)
- ・真実の悔い改め無しに、世界にインパクトを与えることはできないと、強烈かつタイム  
リーに語られた。
- ・今回のメッセージを聞いて、悔い改めなければならない高慢な思いでした今日の行動に  
気づかされた。このことが一番の恵みである。

\* みことば・神学

- ・みことばが聖書からしっかりと語られる必要があること、聖書的な知識が生き方につな  
がっていないのではないかという示唆があった。聖書的な考えをまず実践することが大  
切である。
- ・宣教が伸びていかないのは、主がその状況を許しておられる現実があるのではないか？  
また、聖書のことばを忠実に語っていない、実践していないからではないだろうか？
- ・聖書を神のみことばとして聞くということができているだろうか？と自己吟味した。
- ・「み言葉の宣言」をどのようにしていくのか。「教える」立場の牧師は、日本の文化でど  
のように罪を告白するか。日本の会衆には「教師」に対する期待、ステレオタイプの考  
えがある。
- ・「神学の仕方」をもっと深める必要があるのでは？日本の教会のなかで日本の文化の負の  
側面が変えられないまま存在。神学校教育が知識の受け渡しという寺子屋式に甘んじて  
きたからではないか。
- ・「神学」とは何か。昔、西欧で確立されたものに過ぎない。日本の教会では日本の文化の  
課題や生き方を取り上げ切れていない。「神学」として扱われてこなかったからではない  
か。

\* 倫理

- ・プロテスタントの各個教会主義のために、牧師個人への期待がハリボテのように膨らみ、  
リーダーに弱さのはけ口がなく、罪に陥っていくのではないかと思える。

- ・キリスト教会のリーダーの倫理的問題がどれくらいなのか分からないが、課題があることについて、一般信徒は意外に知らないのでは。どこまで開かれたらいいのか、その開示の仕方についても（週刊誌のようにではなく伝えるとはどういうことか）、問われるのではないだろうか。

\*語り合う場

- ・牧師やリーダーが自分の課題を真に語り合う場や関係があまりないのが現実である。牧師・リーダーの孤立は、問題の潜在化と深刻化を招くように思われる。こうした「語り合い祈り合える場」が少しでも充実することが求められる。
- ・自分の年代の若い世代と牧師との少人数で学び会を持っている。そこで、牧師も自分の弱さを出してくれる。共に祈り支えあう必要をそこで学んでいる。
  - ・K G Kで段階を経てリーダーを育てるということに取り組んでいるが、教会では真剣にリーダーや人を育てる存在を育ててこなかった。これから、宣教団体などで取り組まれていることがそこだけにとどまらず、教会にも影響を及ぼすことができることが望まれる。実際に、宣教団体と教会（諸教会）との乖離は、日本の教会にプラスに働いているとは思われない。今後、これらの創造的な関係の構築が望まれる。
- ・組織で教会を保たせるということは危険である。

\*教会と社会の乖離

- ・教会の世界と一般の社会とのギャップが様々な問題を生じる磁場となっているのではないだろうか。特に、世とは異なる存在であることと、世から離れて独自の世界を作り上げることとで倒錯状況があり、世との関わりが不明瞭になってしまい、結局、世の在り方が教会の中に入り込んでしまっているように思われる。それは、ヨーロッパのキリスト教社会というコンテキストの中で、聖書の伝える社会にある教会の在り方とはかけ離れた教会のスタンスが醸成されてしまったのではないだろうか。

このほか、「教義が異なるとき、排除するのではなく、それぞれの教会に賜物が違うのだから良いのではないか？」 「同性愛の問題にしても、みことば、聖霊に立ち返ることが必要である。」などの意見も出された。

教会内での教職と信徒との間の関係、牧師やリーダーの孤立、社会と教会との乖離が語られる一方で、語り合い、そして祈りあえる機会の大切なことが語られた。イエスキリストは、私たちの仲保者としてこの地に来てくださった。「あの人の思いを聴く隣人になりなさい。」「あなたの思いを聴いてもらいなさい。」「私にあなたの思いを届けて欲しい。」と、主は言っておられるのではないだろうか？

第4回ローザンヌシンポジウム担当チーム 永井敏夫